

はじめに

本研究は、社団法人中央酪農会議より2013年度に委託された酪農教育ファーム調査研究事業「酪農体験プログラムの効果検証に係る実証事例研究」である。

本研究のねらいは、幼稚園（年中組及び年長組）において牧場体験を含む教科横断的な酪農体験プログラムを開発し、園での保育及び牧場での酪農体験を通して、その実践のあり方を具体的に明らかにすることである。

今回開発した酪農体験プログラムは、次のような5つの特徴をもっている。

- ① いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てることをねらいとする
- ② 領域横断的なカリキュラム編成により、環境、言語、人間関係、健康、表現に関わる豊かな活動を組み入れる
- ③ 2回の牧場体験を実施し、その事前・事後活動を豊かに展開する
- ④ 園での酪農家とのふれあい交流会を組み入れる
- ⑤ 「親子料理教室」における牛乳を用いた調理実習を組み入れる

昨年度及び一昨年度に委託を受けた調査研究において設定した教育目標「いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てることをねらいとする」（上記の特徴①）と領域（教科）横断的なカリキュラム編成（上記の特徴②）、そして牧場への訪問回数（上記の特徴③）、さらに園（学校）での酪農家とのふれあい交流会（上記の特徴④）については、本年度の研究においても幼稚園児という発達特性を十分にふまえた上で継続するが、特徴⑤については、本年度において新たな特徴をもつ酪農教育プログラムを開発することをねらいとしている。

昨年度の研究においても、小学校5年生の実践事例においては家庭科の調理実習の一環として、「牛乳グラタンづくり」を組み入れたという点では、本年度の特徴⑤と同様の効果、つまり、子どもの調理体験が、酪農教育のねらいの達成につながることを想定しているが、本年度では、親子とともに牛乳（チーズ）を用いた調理体験を行うことを大切に、牛乳の飲用習慣に関わる強いインフルエンサーである母親が幼稚園児である子どもたちにより高い教育効果を生み出すことを期待した。

このようにして、本年度の研究においては、幼稚園という、これまで酪農教育ではほとんど実践事例がなかった発達段階を対象としたこと、そして「親子料理教室」を組み入れて家庭と幼稚園が連携した教育活動を設定したことにより、新しい酪農教育プログラムの開発が可能になるように工夫した。

この報告書に収めた酪農教育の実践モデルとその具体例が、酪農教育に関心のある幼稚園の参考になれば幸いである。本研究で大変お世話になった新宿区立鶴巻幼稚園（國分重隆園長）と榎本牧場の酪農家榎本求さん、そして多大なるご支援をいただいた一般社団法人中央酪農会議に深く感謝申し上げる。

2014年3月

研究代表者 早稲田大学教職大学院 教授 田中博之

目 次

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 1. 本年度の酪農体験プログラム開発のねらいと特色 | 1 |
| 2. 幼稚園児を対象とした酪農教育カリキュラムの開発 | 5 |
| 3. 年中組（4歳児うさぎ組）の取り組み | 10 |
| 4. 年長組（5歳児きりん組）の取り組み | 17 |
| 5. 酪農教育アンケートの分析と考察 | 26 |
| 6. 牧場体験アンケートの集計と考察 | 37 |
| 7. 研究のまとめと今後の課題 | 43 |
| （資料1） 牛乳と牧場に関するアンケート | |
| （資料2） 牧場体験アンケート | |

【謝 辞】

本研究を実施するにあたりまして、次の方々にご協力をいただきました。記して、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(研究協力園)

- ・新宿区立鶴巻幼稚園 (國分重隆園長) 新宿区早稲田鶴巻町 140

| | | | | | |
|-----------|----|-------|----|----|-----|
| 教務主任 | | 丸山直美 | 教諭 | | |
| うさぎ組 (年中) | 担任 | 日比野直美 | 教諭 | 園児 | 21名 |
| きりん組 (年長) | 担任 | 相川絵美里 | 教諭 | 園児 | 12名 |

(ご協力いただいた牧場)

- ・榎本牧場 上尾市畔吉 736-1 酪農家 榎本 求 様

(ご協力いただいた関係機関)

- ・一般社団法人中央酪農会議 業務部 星井久美子 様
- ・有限会社オフィス ラ・ポート 代表 松原明子 様